

事例 6

公民館を市民自治のプラットフォームとして捉え直す

調査対象

【コーディネーター】

宮城潤（那覇市若狭公民館 館長／NPO 法人地域サポートわかさ 理事）

【関係者】

麻生佐矢香（沖縄県文化振興会／沖縄アーツカウンシル プログラムオフィサー）、上原正弘・上原玲子（琉球フィルハーモニック）、オジャ ラックスマン（沖縄ネパール友好協会）、大仲るみ子（多文化ネットワーク fu ふ！沖縄）、久手堅美咲姫（地球ハートクラブ、アートな部活動参加者）、平良亜弥（アーティスト、アートな部活動ポストポスト部顧問・パーラー公民館スタッフ）、玉寄文代（子ども食堂ほのぼのカフェ・曙小学校区まちづくり協議会）、渡嘉敷洋美（那覇市まちづくり協働推進課）、野原巴（那覇市文化協会）、藤井光（映像作家・アーティスト）、宮平貴子（こども国際映画祭 in 沖縄）、屋宜貢（大名児童館）

事例調査から見てきたポイント

◎ 「そもそも」を問い直す必要性

- 公立文化施設にはハードと有給のスタッフがいて社会的信用があるというそもそもの利点を地域や住民のために活かしているかと問い直す必要がある。
- これまでの事業を漫然と行うのではなく、既存のやり方に一度疑問符を投げかけてみることで、市民の声を聴き、必要とされることを見極めることが求められている。

◎ 「ゆるい」マネジメントが、さまざまな「かかわりしろ」を生む

- まず市民の声に耳を傾けることで、話を聞いてもらえる相手として認識されることが重要である。
- そのためには、コーディネーター側にも「ゆるさ」が必要で、地域と共に悩み、足りない部分は助け合うという姿勢で臨むことが、地域や住民の「かかわりしろ」を生み、文化芸術とのつながりに結びついていく。

◎ 市民が自らの発案で何かを始めるよう導き出していく姿勢

- 地域や市民と文化芸術をつなぐために、コーディネーターが市民に提案していくのではなく、市民の聞き役を務めながら、市民が自らの発案で何かを始めるよう導き出していくのが、コーディネーターの基本的な姿勢である。
- そのためには、文化施設を事業やイベント中心の運営とせず、平時の情報提供や相談業務などへとゆるやかに広げ、そこにコーディネーターを配置することが肝要である。

◎ プロセスを共有できるアーティストと協働することで市民自治力を向上させる

- 文化芸術が地域や市民にもたらす力を理解した上で、アーティストには芸術的な成果を求めるのではなく、市民協働のプロセスに関与してもらうことが重要である。



若狭公民館の外観

- そのことで、コーディネーターの可能性が広がり、市民自身が自ら地域の課題と向き合う市民自治の力が地域にもたらされる。

◎ 「あの人だからできる」 属人性を受け入れる

- コーディネーターに求められる職能は人に蓄積する。コーディネーションを進める際には、画一的な対応を前提としたこれまでの役所的な仕組みではなく、「あの人だからできる」という属人的な能力を活かしていくべきである。
- そのためには、個人の能力と努力を尊重し、力を発揮しやすい環境づくりと人材育成が肝要である。

◎ 行政の下請けではなく政策のパートナーとしての制度設計が必要

- コーディネーターに限らず、現場を担う人材は下請けではなく政策のパートナーであり、行政側は職能や効果を十分に理解した上で、専門性に見合う条件でコーディネーターを配置する必要がある。
- 行政側にコーディネーター人材を置くことで、現場に即した制度設計を行うことも視野に入れたい。

◎ 多領域のコーディネーターをさらにコーディネートする

- 文化芸術の持つ力を、教育や福祉、まちづくりなど多様な領域につないでいくためには、一人のコーディネーターの取り組みだけでは限界がある。
- 他分野のコーディネーターともつながり、そのネットワークを介して多様な地域課題に向き合うことで地域におけるコーディネーターの役割や成果はより広がりを持ったものになっていく。

1. コーディネーターとしての仕事や活動の内容

宮城さんは、現在、若狭公民館の館長として活動している。若狭公民館は1992年に開館、1階は図書館、2、3階が公民館で地域住民の学習の場として誕生した。宮城さんの所属するNPO 法人地域サポートわかさは、地域のネットワーク組織（任意団体）を母体として設立され、2010年に若狭公民館事業の一部を業務委託として請け、2015年に指定管理者となった。

2007年に市民の要望により館長（非常勤）となり3年間の任期後、一部業務委託時代（2010-2014年、館長は市職員、館長業務以外をNPOに委託、宮城さんは業務受託団体の事業責任者として勤務）を経て、2015年度より現在の形で館長職に就いている。若狭公民館では、アーティストを顧問として起用する「アートな部活動」などをコーディネートするほか、沖縄アーツカウンシルの助成で実施した「パーラー公民館」や防災をテーマにしたキャンプの実施など、フットワーク軽く事業を展開している。また、市民からの信望も厚く、さまざまな相談にも応じている。

これまでの活動で培ったノウハウは沖縄のみならず、全国の講習会などで還元するほか、市の職員研修も行っており、今では、「若狭公民館的」な価値観が地域や行政にも広がりつつある。

◎ 公民館の機能は、つどう・まなぶ・むすぶ

公民館は、戦後に民主主義を国民に浸透させる機関として全国各地に設立されたが、高度成長期を境に趣味

*1：藤井光：1976年東京都生まれ。芸術は社会と歴史と密接に関わりを持って生成されていることに基づき、既存の制度や枠組みに対する問いを実証的に検証する作品を制作している。パリ第8大学美学・芸術第三期博士課程 DEA 卒業。日産アートアワード 2017 グランプリ、Tokyo Contemporary Art Award 2020-2022 受賞。



ユーチューブ部の様子
若狭公民館、2021年

や余暇を過ごす場へと変化した。宮城さんは、公民館をその設立の理念に立ち返り市民自治という視点から捉え直す。それは、多様な課題が散在する地域社会で、市民に向き合う、あるいは寄り添う機関として公民館をアップデートしていくという取り組みである。公民館の機能は「つどう・まなぶ・むすぶ」と整理したうえで、NPO としての機動性も活かしたユニークな数々の取り組みを行う。本調査では、(1)アートな部活動～ユーチューブ部と、(2) パーラー公民館の2事例を紹介する。

【インタビュー調査の発言から】

- 公民館はもともと戦後に生まれたもので、地域の住民が、お互いの持っている知識や技術を持ち寄りながら学び合い、地域課題や生活課題に取り組んでいく拠点として設置されていった。(宮城)
- 公民館にとって”自治”はすごく重要なキーワードで、自分たちで地域を治めていくこと、自分たちで地域や社会にかかわりながらできることを動かしていくことが重要な場だと思っている。(宮城)
- 1967年に全国公民館連合会が「公民館のあるべき姿と今日的指標」を示している。そこで公民館の理念として「人間尊重の精神」「生涯教育の態勢の確立」「住民の自治能力の向上」を掲げている。そのための役割として、「集会と活用」「学習と創造」「総合と調整」が示されている。それを分かりやすく、「つどう」「まなぶ」「むすぶ」と言い換えて、社会教育の場ではその3つのキーワードが公民館の役割として広まっている。(宮城)

(1) アートな部活動～ユーチューブ部 市民自治のための道具としての映像講座

「アートな部活動」は、若狭公民館が新しいコミュニティづくりを目指す「アーティストと開発する社会教育プログラム」として、「ダンボール部」「ポストポスト部」「ユーチューブ部」「アート同好会」の4講座を主催している。アーティストや研究者を顧問に置くが、顧問は自分の表現活動として関わるのではなく、市民が自らの表現活動を広げたり深めたりすることを後押しする立場である。それが公民館の重要な理念である市民の自治につながるという。その意味を部活動の一つ「ユーチューブ部」を例に見ていきたい。

「ユーチューブ部」は、地域在住外国人の生活目線でまちを紹介し、YouTube で発信しようという取り組みである。受講生は、映像に興味のある方から在住外国人と交流したい方まで広く募集した。顧問は、藤井光(*1)さんが務めるが、藤井さんはその場では自身のアーティストとしての思想や美学を共有しようとはせず、世界共通で普遍的な撮影技術を参加者と共有することに重きを置く。専門性の高い技術や道具としてではなく、誰にでも手に取れる文房具のような存在として映像の扱い方を伝えることは、社会での立場が弱い外国人たちにとって、例えば非常時に外部に訴えかける手段(市民の武器としての表現)を手に入れることにもつながるといえる。公民館自体を市民自治のための装置と考えれば、この「ユーチューブ部」という取り組みは、趣味としての映像講座を越えた射程をも見据えている。

【インタビュー調査の発言から】

- 文化交流することで、互いを知り合える。沖縄在住のネパール人の生活に不安感があるが、コロナ禍でもどんな活動をしたらいいのか、外国人はどんなことに困っているのかなどを話した。(オジャ)
- 藤井光さんをお願いした理由は、これまで労働者など社会的に弱い立場に置かれている人々へまなざしを向けながら、そういう人たちと一緒にその状況を明らかにしていくような作品をつくってきているから。(宮城)
- 作ること自体は楽しんでやってください、としているが、どこかのタイミングで、もし何かあって社会に向かって「助けて」と言わなければならなくなったときに、映像を作ることが生存のための文房具的な道具になる。



パーラー公民館
あけぼの公園、2017年

*2：小山田徹 1961年鹿児島県生まれ。京都市立芸術大学日本画科、同大学院美術研究科修了。84年、在学中に友人たちとパフォーマンスグループ「ダムタイプ」を結成。並行して90年からさまざまな共有空間の開発を始め、コミュニティセンター「アートスケープ」「ウィークエンドカフェ」などの企画をおこなうほか、コミュニティカフェである「Bazaar Cafe」の立ち上げに参加。

(藤井)

- 当初 YouTube に興味はなかったが、説明会で藤井さんが「YouTube は楽しいだけでなく未来を作るんだ」という話を聞いて、それに興味を持った。また、一緒に参加したベトナム人の友人との関係性を紡ぐのに役に立った。(大仲)

(2) パーラー公民館～地域の人交流し、お互いを再発見してゆく装置

沖縄で「パーラー」は、気軽に立ち寄れる路上の簡易店舗を指す。「パーラー公民館」は、公園の一角に天板が黒板になったテーブルにパラソルを差して、まわりに椅子を置いただけの「青空公民館」である。パーラー公民館誕生の経緯から、その後の活動の広がりまでを俯瞰することで、機能として捉え直した公民館やコーディネーターの役割が浮き彫りになる。

若狭公民館が担当するエリアのうち、館からもっとも遠く、徒歩で1時間ほどかかる曙地区の住民から、自分たちの地域にも公民館がほしいという要望が寄せられた。宮城さんは、ハードとしての公民館を整備するのは難しいが、機能としての公民館を地域に届けることはできると考え、戦後の青空公民館を参照しつつ、市民自治の装置として機動性のある公民館を考えた。アイデアを形に落とし込むためのパートナーに選ばれたのはアーティストの小山田徹(*2)さんだ。小山田さんは、地域をリサーチし、コミュニティの中心にある公園を設置場所として選び、手軽に使えて愛着のわく装置として前述の黒板テーブルとパラソルを提案した。

パーラー公民館は、2017年～2019年の3年間、沖縄アーツカウンシルの支援を得て実施された。初年度は8月から12月に週2回開館し、イベントやワークショップを月に1回、2018、19年度は月3回の開館、イベント・ワークショップは月1回のペースで開催した。2年目の2018年には、曙地区で活動する団体や個人が、手作りのZINE(小冊子)を作成し、それをZINE KIOSKという移動型の棚に展示して曙公園以外の場所へも出かけていく「おでかけパーラー公民館」という取り組みに広げた。これにより、それまで互いに知り合うことのなかった地域団体(まちづくり協議会や福祉団体、就労支援団体など)の間に連携が生まれた。

「つどう・まなぶ・むすぶ」という公民館の機能をコンパクトに実現させる場として宮城さんが意識したのは、オープンで入りやすく抜けやすい場作りとアーティストが介在することによって生まれる変化だという。スタッフは何もせず、地域の方々の話を聞くことを心がける。一方、月に1度のアート・ワークショップが「何もしない」日常との間に生む時間のコントラストを大事にした。

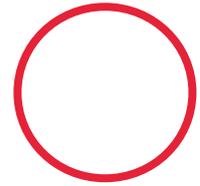
文化施設という、何かする場所で、何もしない時間は冷たく居づらい空気が流れがちだが、なにもない時間こそを大事にするという視点は、コーディネーター業務を考える上で大きなヒントになる。

沖縄アーツカウンシルの支援が終了した後、地域側からパーラー公民館を継続したいという声上がり、2020年以降はまちづくり協議会が運営を引き継ぎ、コロナ禍で状況は変化するものの月に1回のペースで活動を続けることになった。

【インタビュー調査の発言から】

- 戦後は、看板だけ掲げて外で寄り集まって活動した青空公民館というものもあったらしい。そこから着想を得て、施設を造ることはできないが、公民館的な機能が発揮できる場を作ることではできないかと思って、パーラー公民館が生まれた。(宮城)
- つどう、まなぶ、むすぶという役割、機能を発揮することができれば公民館と言えるだろうという仮説を立て、それによって住民の自治能力を向上させることができれば、それこそ公民館の目指していた姿になる。(宮城)

*3：現代美術館ではなく、博物館との複合施設、沖縄県立博物館・美術館（おきみゅー）として2007年にオープン。



全国アートNPOフォーラム in 沖縄チャレンジ
アートNPOリンク、2008年

による新たな自治の創造

- 曙地区の人たちは自分たちの地域は何もないと言っていたが、パーラー公民館を始めたら、いろいろなところでいろいろなことをしているのに、それぞれがつながっていないことが分かってきた。（宮城）
- テーブルが黒板になっていて、黒板にパラソルが刺さって開いている状況を見たときに、これはすごく絵になっていいというのが第一印象。公園の中で、緑のテーブルと白いパラソルが幾つか並んで、このバランスがすごくよかった。それで、パーラー公民館の印象がぐんと上がって、パーラー公民館とはこういうことだというのがみんなに伝わった。（玉寄）
- これまでお互い話すことがなかったのに、パーラー公民館では世代を超えて集まって話すことができる。大人の話が子どもが聞ける。子どもの話を大人が聞ける。子どもたちにそういう状況をもっと見せて発言させていきたい。（玉寄）
- パーラー公民館にせよアートな部活動にせよ、若狭モデルがなるべく他の地域にも広がって欲しいと思う。（麻生）

2. コーディネーターとして活動するようになった経緯

(1) コーディネーターとしての素地が作られた前島アートセンターでの活動

宮城さんのコーディネーター的な活動を理解するためには、前島アートセンターでの実践や試行錯誤（2001～2011年）を理解しておく必要がある。前島アートセンターが立地していた那覇市前島地区は、暴力団抗争をきっかけに市民が寄りつかなくなり寂れていた。当時、沖縄県は県立現代美術館の開設を準備しており、学芸員たちがプレオープンの意図も含めて企画していた展覧会に合わせて、ビルオーナーたちがビルや周辺を活用した展覧会を企画した。そこに学芸員も協力したが、イベント自体は企画者たちで資金調達した手作りのものだった。イベントには40人ほど関わったが、宮城さんは作家としてこの企画に参加した。当時、学芸員はいるものの、予算上の問題から県立現代美術館の構想（*3）がストップしており、県内のアートシーン自体が低迷しているような雰囲気があった。そこで、前島にアートセンターを作ろうという動きが盛り上がり、宮城さんは、半ば巻き込まれるように代表となり、その後法人化された。

前島アートセンター自体は、企業協賛や公的助成なども獲得し、意欲的に事業を続けていくが、人件費に充てられる助成金はほぼなく、宮城さん自身は美術の非常勤講師などの収入で生活をしのいでいた。

2007年にビルが閉鎖することになり拠点を失うが、活動はまちなかへ広がっていたこともあり、しばらくは場を持たない状態が続いた。活動のきっかけであった県立の美術館が博物館と一体化して開館することになり、そのオープンのタイミングに合わせて市内の栄町市場で、数日間のイベントを行った。その場所をそのまま活用し、アートスペースとして運営を続けた。2008年にはこのスペースを起点に栄町市場全体を活用し、全国アートNPOフォーラムも実施している。

このような活動を通じて、前島アートセンターの名は全国区となり、さまざまなNPOやアーティストたちにも知られるようになった。

【インタビュー調査の発言から】

- 前島3丁目という町が暴力団抗争の影響で寂れていったという背景と、県立美術館の構想が止まっている中でアートシーンをどうにか刺激したいという沖縄のアートシーンの背景の両方が合わさって、そこにかかわっている人たちが出会うことによって生まれたのが前島アートセンターだった。（宮城）

- 当時は、専従の職員もない状況で、助成金はほとんどが人件費には充てられないので事業費だけという感じだった。（宮城）
- いろいろなことを手探りで、矢継ぎ早にやっていた。その情報をそれぞれの興味関心で受け取っているのも、前島アートセンターの見え方は人によって全然違う。だからこそいろいろな人がかかわる「のりしろ」みたいなものができて、みんながいろいろなことを勝手にやり始めるみたいな場だった。（宮城）

(2) 若狭公民館の館長に

経済的に苦しみつつも、前島アートセンターでの事業を進めていた頃、2006年に宮城さんは当時の若狭公民館長に出会い、非常勤職員として公民館の仕事をするようになった。指定管理者制度の導入が検討され始めた時期で、若狭公民館は2004年から民間公募の館長を据えていた。その非常勤館長が3年の任期を終えるときに地域住民の中で後任をどうするかという議論が起こり、その中から宮城さんを館長にしようという署名運動が始まった。1年間の勤務で人となりを知られていたことに加え、前島アートセンターでの活動がよくメディアに取り上げられていたこともそうした動きを後押しした。

その結果、宮城さんは2007年4月からは館長（非常勤）として仕事をするようになる。その後2010年に体制が変わり、市から館長が派遣され館長以外の業務をNPO（地域サポートわかさ：宮城さんを館長に推した市民ネットワーク組織が法人化）が受託し、宮城さんはNPOの事業責任者という立場に変わる。5年後の2015年度からは、NPO法人地域サポートわかさが指定管理者となり、宮城さんは再び館長となった。

◎ 当たり前を問い直し、市民の声に耳を傾けることから始める

宮城さんは、前館長が残した市民の期待感を受け継ぎつつ、それ故のやりづらさも抱えながら独自の事業展開を模索した。「100人でだるまさんがころんだ」という事業を通じて、若い世代の関心事や公民館のイメージをヒアリングすることから始め、地域で活動を起こしたいという人たちとつながっていく。既存のやり方に一度疑問符を投げかけて、場や組織の可能性を捉え直していくことが、宮城さんの仕事に通底する考え方である。

また宮城さんは、当初公民館の仕事に就いたときに「有給スタッフがいて、それなりの設備があり、社会的にも信用される」と感じたと言っている。既存の文化施設や仕組が必ずしも十分に活かし切れていない現状を考えると、文化施設で働くすべての管理者やスタッフが真摯に向き合うべき言葉であろう。

【インタビュー調査の発言から】

- 公民館には、施設があって、それなりに設備も整っている。NPOで事業をやる際、助成金を貰っても人件費には使えなかった。それに比べて、公民館には有給の職員がいるし、社会的に信用もされているし、すごい資源だと思った。しかし、あまり生かされていないというか、趣味、レクリエーション的な活動ばかりでもったいないと感じた。前島アートセンターでは、母親が夜も働いている母子家庭の子どもが500円のホットサンドを注文して、遅くまでそこにずっといることもあったし、昼間から酔払った人やギャラリーの外でずっと寝ている人がいるというのが日常だったが、公民館にいとそういう人たちにはほぼ出会わない。（宮城）
- 青年対象の事業予算が付いてやることになったが、そもそも必要があるのかという問いかけから見直した。若い人が来ないから来るようにしようというのは公民館の事情で、本人たちのニーズ・課題とは関係ない。彼らのニーズ、課題意識とマッチしないのであれば、公民館で事業をやる必要はなく、彼らが必要とすることと、その提供者をつなげればいい。（宮城）

3. 宮城さんのコーディネーター業務の特性と成果

(1) 市民の「かわりしろ」を生む「ゆるい」マネジメント

コーディネーターとしての宮城さんの仕事をシンプルに表現するならば、「ゆるい」という一言に集約できるだろう。そのゆるさは、アートや社会教育、あるいは福祉やまちづくりの間にある境目をあいまいにしていき、さまざまな人が関わりやすい「のりしろ」のような部分をつくっていく。それは、地域からの声に対して否定せず、自分ではわからないこと、できないことは人を頼り、人から相談を受けたら、答えが見つからなくとも共に悩むというスタイルに現れている。かといって仕事のすべてがゆるいわけではなく、そのゆるさがとても戦略的に機能する側面もある。

インターフェースはゆるいけれど、事業の先に見据えていることや、成果を出すまでのプロセスが入念に考えられているのは、アートな部活動でもパーラー公民館でも共通している。このような宮城さんのゆるさのコーディネーターは、若狭公民館での実践にとどまらず、市内外のさまざまな組織、団体にも伝播している。

【インタビュー調査の発言から】

- 困ったことがあっても断らずに、一緒に「どうしたらいいかなあ」と悩んでくれる。関係性をすぐに切らないこと。窓口になる人として、引っ張っていくというよりは、共に悩む。それが人を引き寄せるのかもしれない。（平良）
- 話し方が穏やかなのと、絶対に怒った顔をしない。いつもにこにこしていて、目がゆるんでいる。そこからして近づきやすい。本当に誰もが近づいていって、何か話したいという雰囲気がある。（玉寄）
- 最初に否定しない。そこが行政運営の公民館との違い。（上原正弘）
- ノーを言わず、すべてを受け入れて、冷静に人と人をつなげていく。困りごとの相談時のゆるさと解決を考えるとときの適確さが素晴らしい。（宮平）
- 子ども国際映画祭（KIFFO）も「ゆるく」をテーマにしているが、それは若狭公民館の姿勢の影響を受けている。「ゆるく、楽しく、KIFFO する」。KIFFO るとは、忌憚なく意見を言い合うという意味。（宮平）
- 例えば、ポストポスト部の活動は「若狭公民館のポストに投函された手紙のお返事を書く」がメインだが、それ以外にも世間話をしたりゲームをしたりとのんびりしている。そのゆるさが参加者の安心感や心を開ききっかけになっている。（麻生）
- 若狭公民館は単なる社会教育施設の枠を飛び出ていると感じていて、そういうことを「なは一と」（那覇市に新設された公立文化施設）にも活かしていけないかと思う。アート系の人たちの思考回路は普通と違って、そういうことをまちづくりにも活かしていきたい。（野原）
- 若狭公民館は地域にアートのコミュニティをつくっている、地域で人を育てていると思う。ここにくると、何かつながれるチャンスがある。外国人留学生に沖縄の踊りを伝えたくて、公民館で活動している団体に声をかけてできるようになった。（大仲）
- ネパール留学生の存在が地域で可視化されることにもつながったと思う。（オジャ）
- 若狭公民館と大名児童館と一緒にやっている事業としては「政治って何だろう」とか、「朝食会」を若狭公民館とオンライン中継して行ったりもしている。「この平和な時間ってなんですか？」と子どもたちが喜んでいる。（屋宜）

*4: ソーシャルワークなどにおける自己覚知 (self-awareness) とは、援助者が自分自身について客観的に理解することで、クライアントを理解し信頼関係を構築しようとするとき、自己の価値観や感情などに左右されないようにしようという考え方。

*5: ブリコラージュは、計画的に準備して行うことは対照的な考え方で、その場で手に入るありあわせの材料を寄せ集め、試行錯誤しながら、新しいものを作る手続きことである。

(2) コーディネーターの自己覚知 (*4)

「自己覚知」は、ソーシャルワーカーをはじめとする対人援助職に必要と言われる概念である。教育の分野では、主に新任教師が自らに足りないところも含めて生徒と共有し、共に育とうとするような態度を指す場合もある。宮城さんや関係者のインタビューでは「ゆるい」という単語が頻繁に登場するが、これは「自己覚知」ができていない状態で、特に地域との協働により共に育っていくことを意図するコーディネーターにとって大切な態度だと考えられる。

【インタビュー調査の発言から】

- (前島アートセンター時代は) 戦略的にやったのではなく、いろいろなことができない人が代表だったのがよかったですと後付けで気づいた。僕も頑張ってきたとできるようになりたいと思ったことがあるが、その必要はないと開き直すことにした。(宮城)
- コンセプトや目標が明確で、一直線に進んでいるのであれば、関心のある人がどんどんかかわって、推進力も生まれるかもしれないが、僕は曖昧だった分、いろいろな人がいろいろな可能性を感じて、その可能性に対してかかわってきた。(宮城)
- きちんとやろうと思ってもできないので、基本的にきちんとすることはあきらめている。(宮城)
- できるできないをはっきり言わない。成果をすぐに求めないタイプ。それがいいのかもしれない。ゆるく人の話を聞く。「こういうアイデアもあるんじゃない?」というスタンス。また、行政とも喧嘩をしない、長期視点では、それが良いのでは。魅力は頼りなさを自分で表現しているところ。だから、周りが勝手に動いてくれる、「僕は何もしていない」というスタンスを保っているのはすごいと思う。(屋宜)

(4) プロセスを重視するアーティストとの関係性

クリエイティブな部分を担うアーティストにはアウトプットではなくプロセスに関わってもらおうというのも、宮城さんのコーディネートの特徴である。公民館の目的が芸術の成果を発表・鑑賞することではないということもあるが、市民と協働して思考を重ね、手法を考案しながらモノやコトをつくるアーティストも多い。市民や地域の課題の根が深く、影響が多様に表れるような場合、既存の支援スキームだけでは取りこぼしてしまう部分があるため、このようなアーティストたちの問題意識や手法について広く学び、感性や表現の部分で地域に向き合うのも、コーディネーターの大切な役割だろう。

【インタビュー調査の発言から】

- アーティストが市民の創造力を刺激していくことや、イメージしたことを具現化する力にはすごいものがある。(宮城)
- アーティストがどのような問題意識で、何をしているか知らないとお願ひできない。(宮城)
- 基本的に小山田さんはブリコラージュ (*5) というありものを組み合わせて新しい価値を作るという考え方でやっている。(宮城)
- 三脚やカメラの使い方は普遍的な言語で、コミュニケーションが起きやすい。これが、美学や思想の話になると、互いの違いが壁になりなかなかコミュニケーションにつながらない。(藤井)
- 企画が固まってから、相談して、形をつくってもらうのであれば、それはデザイナーや技術者の仕事で、アーティストのいいところを制限してしまう。この辺も僕自身がふわっとしているのがいいのかもしれない。何となくもやもやとやりたいことはあるが、どうしていいかわからないという段階で、相談に乗ってもらおうと、そ

こからいろいろなアイデアが出てくる。(宮城)

- 例えば、「ユーチュー部」という名前もゆるい。多分東京だと、藤井光さんを招いてユーチュー部というタイトルのワークショップはしないと思う。(宮城)
- こちらとしては、公民館で外国人向けの取り組みをユニークな切り口でやることが重要で、地域に根差した施設だからこそ、外国人向けの取り組みをすることそのものに意義があると思う。そこで、楽しく映像を作ることや、できた作品を通してお互いのことを知り、理解することが必要だと思った。(宮城)

(5) 地域のコーディネーターとして多様なつながりの結節点となる

宮城さんは、「地域」と言うとき、地域団体やグループなど、それぞれがイメージする地域の人がいるが、つい忘れがちな人もいます。コロナ禍のような事態においても、地域活動は既存の組織前提で進んでいくが、組織に属していない地域住民が多層で多様にいることも自覚しておく必要がある」として、コーディネーターは、「支援の網の目をすり抜けてしまいがちな人たちやコミュニティともつながりを持ち、横断したり、風穴を開けたりする取り組みが必要だ」と指摘する。

このようなつながりの媒介として、スポーツやレクリエーションまでを含めた広義の文化活動は最適だと考えられる。行政施策の福祉や教育、観光、産業振興などはそれを必要とする人や団体を対象としているが、広義の文化活動は生涯にわたり誰もがアクセスできるからである。さらに、文化活動をイベント中心にとらえるのではなく、市民の話し相手として、日常的な付き合いができる関係性を築いていくこと、あるいは多様なつながりの結節点となること、さまざまな「市民自治」「市民協働」の苗床につながっていく。コーディネーターはそのような仕事を担う職として認識する必要があることを、宮城さんの仕事や成果は示している。

【インタビュー調査の発言から】

- 社会教育法での公民館の位置づけを見ても、地域がフィールドで、活動を行う拠点として公民館がある。(宮城)
- 文化芸術だけではなくて、いろいろな要素が地域社会の中にはあり、それが切り分けられない。(宮城)
- 公民館の中で活動していると、文化芸術に限らないほうがいろいろ見えてくる。実はすごく多様につながっていることが見えるし、その広がりの中で活動していると、文化芸術の力、アートの力をすごく感じるができる。(宮城)
- 沖縄に住む外国人にとって若狭公民館のようなところはない。沖縄ネパール友好協会の名前も知られるようになった。(オジャ)

4. 問題点・課題

今後、コーディネーターの仕事を推進するうえでの問題点や課題として、宮城さんからは「あの人だからできる」という属人性を避けようとする姿勢は、結果的にマイナスに働き、社会との乖離を生むという指摘があった。また、インタビュー調査の中で、コーディネーターの所属する組織が指定管理者として行政の下請的になってしまうという問題点も指摘された。

(1) 「あの人だからできる」属人性を受け入れる

行政組織は、担当者が替わっても同じ対応で同じ成果を残せる仕組みづくりを優先する。しかし宮城さんは、

働き過ぎは論外にしても、そうした姿勢は担当者のやる気を失わせ、結果的に活動やサービスの質を低く抑えることにつながる、と指摘する。それよりも、やる気のある個人を後押しし、その個性を少しでも一般化できるように学び合うことの方が重要だというのが宮城さんの考え方である。窓口対応ですらまったく同じということはないことを考えると、個人の特性を前提としながら、人を育てることのほうが重要だという指摘も、コーディネーター活動を推進するうえで大切なポイントであろう。

【インタビュー調査の発言から】

□ 「あの人だからできる」属人性を受け入れること

- 幾らみんな同じように対応できるように徹底しているつもりでも、実際に行政の窓口に行く人と人によって言うことは違うし、対応が変わるのをわれわれはさんざん経験している。人の特性によってでこぼこが出ることを前提としながら、人を育てることのほうが重要ではないか。（宮城）
- 行政職員のマインドが、人によって対応が変わってはいけないということを前提にしている。そうすると、ものすごく低いところにそろえて、頑張らないようにさせてしまうみたいな文化がある。（宮城）
- 人によるというのは、大抵悪い意味、弊害があるという意味で使われるが、人によるからこそ人を大事にするという方向に向かえばいいと思う。（宮城）
- 「あの人だからできる」という属人性を否定するのではなく、人によるものだという前提で仕組みをつくるほうが、次のもっとおもしろいステップに行けるような気がする。（宮城）
- 人によってそれぞれ特性があるし、いいところは人によって違うので、いいところに合わせてやっていけばいい。もし、その人が抜けて同じことはできなくなったとしても、一度つくったものがあれば、それを見ながら半分ぐらいはできたりする。でも、今は、その人じゃないとできないということ無くそうとして、10あるうちの1ぐらいのところをみんな抑えようとしていると思う。一度つくってしまったら、同じレベルのことはできなくてもそれに近づけようとするはずなので、その辺の理解や雰囲気が欲しいと思う。（宮城）

□ 属人性を嫌う文化が社会との乖離を生む

- 社会はこんなに大きく変化しているが、行政機関はなるべく個人の能力に依存するがんばりを抑えようとするから、社会との乖離が出てきて、追いつけない状態になっている。（宮城）

(2) 下請的な指定管理者からの脱却

宮城さんは指定管理者の立場で若狭公民館の館長を務めている。指定管理者は行政組織が設定した条件のなかで業務を行うため、下請的になってしまうケースが少なくない。行政が求める以上の成果を残して、指定管理料を交渉するという宮城さんの姿勢は、コーディネーターの働く環境を改善し、結果的に地域や市民に対するサービスの質的向上につながるという点で、学ぶべきことが少なくない。

- 指定管理者としては、普段から行政と丁寧な付き合いをしつつ、仕様書（業務の基準）以上のことも行っている。そういう実績を踏まえて、指定管理者に応募する際は、適正な価格（想定額以上）で見積を出し、交渉していく。（宮城）
- 行政のシステムの中では、指定管理者は下請けとならざるを得ないポジションとなってしまうことに不満がある。宮城さんの立ち位置は、行政的には課長的なポジションだと思う。まちづくり協働推進課ができてずいぶん話しやすくなったが、市政にちゃんと宮城さんのようなポジションを設けたほうがいいと感じる。そうすると、市民がもっとやりやすく、もっと活性化するかと思う。（屋宜）

- 宮城さんは行政へ厳しく意見してくれることもある。那覇市がコーディネーター養成を目的とした「なは市民協働大学院」を企画したとき、宮城さんは運営委員長（アドバイザー）を務め、わずか全8回のプログラムではコーディネーターはつくれない、と指摘してくれた。我々は、安直だったとプログラムを作り直し、コーディネーター的視点を学ぶきっかけづくり的な講座に切り変えた。（渡嘉敷）
- 若狭公民館の名前を出すと市役所などで信用されるという面もある。（屋宜）
- 宮城さんには那覇市協働によるまちづくり推進審議会にも委員として参加いただいている。また、那覇市の新任主査研修（毎年70名程度対象）も、協働やまちづくりをテーマに宮城さんに講師をお願いしている。（渡嘉敷）

5. コーディネーター推進の方向性

今後、コーディネーターの活動をより一層推進するためには、(1) 市民が自らの発案で何かを始めるよう導き出していく姿勢、(2) 地域のカウンセラー的に活動すること、(3) 多様な領域のコーディネーターをさらにコーディネートすること、が求められている。

(1) 市民が自らの発案で何かを始めるよう導き出していく姿勢

地域や市民と文化芸術をつなぐために、コーディネーターが市民にこのようなことをやったらいいと提案していくのではなく、参加する人が自らの発案で何かを始めるようにうまく導き出していく、というのが宮城さんのスタンスであった。それは今回の事例調査で取り上げるコーディネーターに共通する姿勢である。そのことで、市民自らが、行動を起こし影響し合う市民自治の地盤を固めることにつながると考えられる。

【インタビュー調査の発言から】

- こちらがつくったサービスを提供するのではなくて、いろいろな人が刺激を受けて、発案したものを必要な人やものをつなげて形にしていくサポートをすることで、そういうことが起こりやすい環境をつくっていく。（宮城）
- パーラー公民館では、「何もしない」ことをスタッフにリクエストしているが、それは、先にこちらがやろうとするのを避けて、地域の人たちから出てくる声を受け止めるためだ。その声を表面的に聞くだけでは何も生まれないが、地域の人何かやろうとして動き始めるのを後押しする。そこで失敗や経験をする中で気づき、学んできたことはしっかり腑に落ちると思うし、次に繋がっていく。（宮城）
- 3年間で、最初はわれわれがやっているものに参加するという感じから徐々に一緒にやるようになっていき、最終年度は、スタッフの行けない日が多くなったのを逆手にとって、一人は若狭公民館から、もう一人は地域の人からというシフトを組んでもらった。引き継ぎ後は完全に曙の地域の人たちが運営するようになった。今は月1回の開催になっているが、逆にいろいろなものが集中して、盛り上がり方が半端ではない。成果はこちらの想像以上。地域が主体となって、僕らは遊びに行く感じだ。（宮城）

(2) 地域のカウンセラー的に活動する

宮城さんとアーティストとの関係を見ると、地域や市民と文化芸術をつなぐコーディネートにおいては、アートやアーティストと地域や市民をフラットに捉えることが大事なことがわかる。アートを高いところにおき、アートのために地域や市民を使うことがないように気をつける必要がある。求められるのは、アートと地域と行政それぞれに対して翻訳者として振る舞えること、そして、アートやアーティストの力をうまく活用して、

*6:『人とつながり、まちを元気にする』コミュニティナースは、職業や資格ではなく実践のあり方であり、「コミュニティナースング」という看護の実践からヒントを得たコンセプト。地域の人の暮らしの身近な存在として『毎日の嬉しいや楽しい』と一緒に作り、『心と身体の健康と安心』を実現する。その人ならではの専門性を活かしながら、地域の人や異なる専門性を持った人とともに中長期的視点で自由で多様なケアを実践する。出典：Community Nurse Company 株式会社ウェブサイト

地域や住民の課題にカウンセラー的に向き合っていくことだという意見も聞かれた。

【インタビュー調査の発言から】

- 地域にカウンセラーがいればいいと思っている。カウンセリングのために、わざわざどこかに行くというのは敷居が高い。また、地域に保健室の先生みたいな人がいたらいい。そういう人がいる場所としての公民館。地域にある相談窓口としての公民館であるといい。(久手堅)
- コミュニティナース(*6)という活動が始まっているので、参考になるのではないか。(野原)
- 創造力が社会をプラスに変えていくことを若狭公民館が実証している。それを受けて、創造的な活動をしている人たちの経験や思考が職につながる仕組みを作れると面白い。那覇市が先立って取り組んでくれたらすばらしいと思う。コーディネーターは、社会をより良く変えていく役割も大いに担っていると思う。(平良)
- 最前線でコーディネーターをたくさん見てきた。その人次第で、結果が大きく変わってしまうのをよく知っている。このみさん(ユウチュー部の担当者)は、参加者とも水平的な関係が作れる。私はアートを知っているが市民は知らない(上から目線)という人は、アート愛はあるかもしれないが、コーディネーターとしては失格。市民一人一人に対して敬意があって、アートのこともわかっている人。もうひとつは、行政との対話・コーディネーションができる人。行政の人向けに翻訳できる人であることも大事。(藤井)

(3) 多様な領域のコーディネーターをさらにコーディネートする

インタビュー調査では、宮城さんにコーディネーターのコーディネーター、コーディネーターのまとめ役になってほしい、という意見が複数の方から寄せられた。文化芸術の持つ力を、教育や福祉、まちづくりなど多様な領域につないでいくためには、一人のコーディネーターの取り組みだけでは限界がある。文化芸術のコーディネーターが、他分野のコーディネーターたちとつながり、さまざまな領域の結節点となっていくことで、より大きな成果に結びついていく可能性がある。

また、前述のユウチュー部でも宮城さんの部下の担当者がコーディネーターの役割を果たしているように、コーディネーターをさらにコーディネートする構造の中で、互いがコミュニケーションを多く取り、より良い関係で進める必要がある。文化施設が事業やイベント中心の運営とならず、あるときは市民の話し相手となり、あるときはアーティストとの関係性を的確に築けるようにするためにも、コーディネーターが安心して働ける環境を用意することが肝要だろう。

【インタビュー調査の発言から】

- 那覇市には協働を進めるための市民協働大使がいるが、そういう人たちをコーディネートができる人材が必要。ぜひ文化施設の中でそういったことができる人材を養成できないかと思っている。(野原)
- 自分の地域の公民館では、地域の人は図書館で本を借りるくらいで、職員の人と交流することはない。個々の活動が、市内の公民館でどうシェアされていくのか。地域に愛着を持つ子どもや市民が増えていくことを願う。(大仲)
- 宮城さんにはコーディネーターのコーディネーターになってほしい。判断して責任を負う役。コーディネーターが動きやすい環境を作る。(屋宜)
- アーティストやコーディネーターが行政のポジションに着くこともあり得る。沖縄にはかつて踊奉行(組踊りの創始者と言われる玉城朝薫など)がいた。中国と薩摩との板挟みのなか、両方をおもてなしする役割。(上原正弘)

-
- 地域コミュニティに参加しない人も多い。アートの切り口で、新しく人が集まるコミュニティを作れるのではないか。（上原正弘）
 - 宮城さんにコーディネーターのまとめ役になってほしいと思う。那覇市でいろいろなものを見ていても、責任を負う人がどこにもいないので、たらい回しになっている。宮城さん自身が、おもしろい文化芸術が街中にあふれるような取り組みを仕掛けるのではなくて、さまざまなコーディネーターが動きやすい環境をつくっていく。（屋宜）

